２０２２年１０月２３日（聖霊降臨後第２０主日、特定２５、C年）
牧師メッセージ
「続・祈りについて」
（ルカによる福音書18:9-14）

司祭ヨセフ太田信三

先週に続き今週も、「祈り」について、主イエスがお話をなさいました。今週のたとえでは、「うぬぼれている」人として、ファリサイ派の人が登場します。ファリサイ派の人々は、律法をあらゆる現実の状況に当てはめ、解釈し、具体的にし、それを正確に守ろうとしました。しかし残念なことに、「あの人と違って、わたしはこれができているから正しい」と、彼らはいつも誰かを罪人としなければ、自分たちの正当性を確認できませんでした。彼らの祈りはもはや、単なる自己肯定の宣言になってしまっていたといえます。

他方、徴税人は遠くに立ち、神殿に登ることも、目を天に上げることもできず、胸を打ちながら祈りました。主イエスの時代、徴税人はユダヤを支配していたローマ帝国のため、同胞のユダヤ人から税金を徴収する役目を担っていました。その役職につくために多額の資本を投じたとも言われ、なんとかそれを回収する必要もあり、不正な方法で取り立てることもあったようです。それゆえ徴税人は、同胞であるユダヤ人にしてみれば支配国の手先、十戒の「盗むな、偽証するな」に照らせば、罪人に他なりませんでした。

世間的に見て正しいのは、律法をよく学び、忠実に生きようとしたファリサイ派の人に決まっています。しかし、主イエスは「義とされて家に帰ったのは徴税人の方」だと言います。義とされる、とは「神に善しとされる」とか、「神との正しい関係に入る」という意味です。それは今日の文脈で言うなら、どちらの祈りを神は喜ばれたか、ということでしょう。神の前で自分を誇ろうとしたファリサイ派の人と、自分のありのままを神の前に差し出した徴税人。主イエスからみれば徴税人の祈りこそ、神が喜ばれる祈り、神との正しい関係を表すものだったのです。

わたしたちは日々、罪深さや自分の弱さを克服することに力を注ごうとします。また、それが良きことだと考えがちです。もちろん、それはとても大切なことなのですが、しかしそこには、自らの行いや力に頼り、神から離れてしまう落とし穴が潜んでいます。主イエスは、弱さは神の憐れみに出会うための入り口、門だと教えています。自らを、弱さもろとも主の前に差し出し、主に頼って生きたいと願うとき、十字架上で最も弱い者となってくださった主イエスが、両手を広げて迎えてくださいます。そして、主イエスに迎えられ、主と共にある命を生きることによってこそ、わたしたちは本当の意味で、神に喜ばれる歩みをすすめることができます。

主イエスが来られたのは、「正しい人を招くためではなく、罪人を招くため」です。さて、わたしたちは主の前にどのように立ち、祈っているでしょうか。自らを顧みます。